

梶山季之傑作集成

3

悪の勇者

梶山季之 傑作集成企業篇

悪の勇者

〈検印省略〉

	悪の勇者 梶山季之傑作集成 8 定価 五五〇円	著者 梶山季之	昭和四十七年十二月三十日 発行	昭和四十八年 十月三十日 二刷	発行者 矢貴東司	印刷所 太平印刷社		発行所 東京都中央区日本橋蠣殻町一丁目	十二番地 株式会社 桃源社	
--	-------------------------	---------	-----------------	-----------------	----------	-----------	--	---------------------	---------------	--

梶山季之傑作集成

悪の勇者・目次

詰め腹	7
唇さむし	41
どんでんがくる	75
現代の忠臣蔵	98
悪の勇者	130
P R 犯罪の蔭に	154
紐育から来たスパイ	169

ポケット作戦	192
黒の燃焼室	215
失脚のカルテ	265
スクープの内幕	272
人間蒸発	298
ミシガンから来た忍者	315
あとがき	

装
幀
上
矢
津

悪の勇者

梶山季之傑作集成

詰め腹

一

——大広間の、金屏風を背にした舞台で、踊りが披露されていった。いま、赤坂では若手のなかで一番といわれている、小菊の「娘道成寺」である。

葛原大三は、その小菊の舞い姿で、青山に囲っている花江のことを思ひだした。

花江も、かつては新橋の芸者だった。踊りも唄も下手で、よく姐さん芸者からいじめられ、座敷でも小さくなくて、泣きだしそうにしていたものだ。

その色の白い、内気そうな所が気に入って彼は手をつけた。意外にも毛深い女で、性的に淡泊な点も彼の好みにあっている。

年齢はたしか、二十六になる筈であつた。囲ったのは四年前である。もしかしたら葛原は、花江の若さに惚れたのかも知れぬ。

月の手当は、五万円ほど出していた。新橋の芸者を囲う

にしては、飛び切り安い値段である。だが手当のほかに、株の配当収入があつた。将来を保証する意味で、彼が、自分の経営している「世界石油」の株券を、花江の名義にしていたからである。

自分の所有している株券を、適当に名義を変えて分散しておく意味もあつた。その後、二度ほど倍額増資があり、そのたびに金を出してやつたから、かれこれ二十万株ぐらいにはなっている。

年一割四分の配当から、このところ七分に低下しているが、それでも年間に七十万円の収入である。だから総合すると、決して悪い方ではない。

「今夜あたり、顔を出してやるかな？」

彼は、そんなことを考え、ブランドーを口に運んだ。とたんにテーブルから、拍手が湧いた。小菊の踊りが終わったのである。葛原は慌ててグラスを置き、申し訳のように手を打った。

「だいぶ疲れているね」

正座に席を占めた代議士の沖浩介が、いたわるように声をかけた。

「とんでもない。考えごとをしていたんですわ」

葛原大三は強く首をふった。

「女かい、仕事かい？」

沖はそう云って冷やかした。それを待っていたように、

芸者衆が手を叩いて笑った。一座には、政界、財界で名前を知られた人物が並んでいる。

「沖会」という、毎月十五日に、沖浩介を中心にして集まる定例会である。同郷の誼みもあって、葛原大三は、沖浩介の後援会に名を連ねていたのだ。

そうして、沖代議士が政権をとるようにと陰ながら運動し、平均して年間五千万円は、「沖会」に政治献金をつづけて来ている。いわば葛原は、沖代議士の大スポンサーでもあったわけだ。

不断の彼ならば、この定例の沖代議士の会に出席しても、わがもの顔に大きな声で冗談を云い、芸者をからかったりして、はしやぎ廻っている。誰よりも多く沖浩介に政治献金をしているという自信が、彼にそんな態度をとらせるのであった。

その葛原が、今夜はひどく無口で、むっつりしながらブランドーを舐めている。これでは誰の眼にも、不審に写る筈である。

「仕事オンリーの葛原さんのことだから、寝ても覚めても仕事のことを考えているんでしょう」

大学の後輩で、通産省の局次長をしている竹村五雄が、そんなお世辞を云った。

「むろん仕事だろう」

「また、どこかに石油精製所でも、建設するんですか」

「いや、葛原社長は、玉島のコンビナートに熱中しているんだよ……」

竹村のお世辞がきっかけとなって、一座に付らなつた人から、いろんな野次や、賞讃の言葉が飛んだ。葛原は努めて笑顔をつくり、その厚ぼったい掌をふった。

「今夜は、沖先生をサカナにする会ですぞ。なにもこの儼を、サカナにすることはない」

「ほう、むきになったぞ？　すると、やはり仕事のことか？」

沖浩介は、調子づいて、またそんな他愛のない冗談を云った。彼は、よく発達した顎のあたりを、ごしごしと撫でさすった。

「まさか！　実は、女と別れ話がでいましてね」

「ほう？　どっちの分？　若い方が、年増の方か？」

また一座は笑いに包まれた。どうも代議士の沖は、なにか嬉しいことでもあった模様である。政治家というものは、自分の後援者には、とかく愛想がいいものであるが、今夜はとくに機嫌が良い。

「葛原君はインターナショナルだからな。アメリカや香港にも、女性がいるという噂じゃないか！」

彼は際限のない沖代議士の冗談に、迷惑そうに顔をしかめた。実際には、女の話どころではないのだ。

——その日、彼は世界石油の主力銀行である東和銀行の

加賀頭取と呼ばれて、思いがけない話を耳にしたのである。

それは、腹心の部下であり、片腕だとも思っている世界石油の専務、橘幸三郎の彼に対する裏切りであつた。簡単にいうと、背任横領である。

加賀頭取は云つた。

「葛原さん。私は自分の職業上、いろんな会社を見て来たが、こんなに出鱈目な、世界石油ほど無茶苦茶な会社はありません」と――。

いつもの加賀と、言葉つきが違つていた。

「おや？」と葛原は思ったが、銀行家は企業に対して常に不安の念を感じているものだ。結婚前に綿密に調査して嫁入りさせながら、やはり婿に危惧の念を抱く舅の心理に似ている。

それで彼は答えた。

「出鱈目といえば、そうかも知れません。しかし、加賀さん。それを承知で、世界石油に金を貸してきた、東和の方も、あまり自慢にならんじゃないですか」

加賀は、彼の言葉をきくと、ピクリと眉を動かした。加賀頭取は、どこの財閥系にも属さない、いわば戦時中の統合令によって統合されただけの、寄せ集めにすぎない東和銀行を政治力で引きずりながら、預金量では日本第三位の

大銀行にのし上げた功労者だ。

だから、この男には、他の銀行マンには見られぬアクの強さと、一種の自信とが漲っている。

「でもね、葛原さん。これは一体、どういふことなんだ。ちよつと悪質すぎる」

「なにが悪質ですか？」

葛原大三は気色ばんだ。

加賀が銀行家として一流なら、自分だつて日本一の経営者だという自信はあつた。

――彼が世界石油の社長に就任したのは、朝鮮動乱ブーム後の、不況のさなかであつたのだ。そして世界石油は、やつと下関に製油所を完成し、操業を再開したばかりの、業界では微々たる存在であつた。

たしか売上げも、業界で最下位であり、「これではいかん」というので、純元売業者から輸入精製業者にと転向したばかりの時に、急逝した前社長のあとを彼が継いだのだ。

苦しかった。とにかく一番苦しい時期だつた。そして彼は、血の小便ばかり出たことを記憶している。

ところがどうだ。

市場拠占率では、四・七％に過ぎなかつた世界石油が、売上げ四百億円、業界では第三位の石油会社に成長している。めざましい、驚異的な進歩ぶりではないか……。

彼の反抗するような言葉に、加賀はさらに強く高飛車に云った。

「これを御覧なさい。この数字を！」

相手の指先は、封筒からとりだした、タイプで打たれた一通の書類を、ゆっくり敲いている。

それは、橋専務の背任横領の事実を、克明に調べ上げた報告書であったのだ。

……正直に云って、葛原自身も駭いた。

専務の実権をもつ橋幸三郎が、自分の知らない間に、政治献金のファンドを流用し、私腹を肥やしている。それも一億や二億という金ではなかった。

調査報告によると、政治献金、香港製油所の建設その他で、ざっと六億円の大金が横領されたと推定されている。

へあの橋が……まさか！

彼も一度はそう思った。

しかし、冷静になって調べてみると、いちいち思い当るふしがある。

「この数字は、決して嘘ではありませんよ。三月期るときは利益は十五億円だった。それが九月期には七億八千万円、そして今期の利益は四億円を下廻るそうじゃないですか。この調子では、配当だって、六分出せるかどうか、怪しいものです。違いますか？」

「……」

「東和銀行としては、橋専務を信用できません。次の株主総会で、クビを切って下さい。それから……葛原さん。貴方の政治資金の使い方にも、今後は銀行として、干渉させて貰いますよ？」

加賀頭取の言葉は冷ややかだった。

彼は、なにも答えず、その儘帰ってきた。不愉快だったのだ。信頼していた友人から裏切られたことも、頭からおさえつけるような銀行側の態度も——。なにもかもが不快でそして不服であった。

この昼間の出来事が、今夜の彼を沈み込ませていたのである。はなやかな赤坂の宴席につらなりながら、浮かぬ表情になるのも、彼の身にとってみたら当然であった。

——その夜、葛原大三は、珍しく青山の妾宅に泊った。

彼はなにもものか判らぬ、ある苛虐的な心理に陥って、花江の白い肌を、いつになく執拗に責め立てていた……。

二

葛原大三が、経営者として成功したのは、その事業における積極性である。

ただ彼自身は、事業を推進させるものは人間という資本であり、政治力であると考えていた。いや、これは彼の信念である。

「世界石油」は、もともと石油の小売業者として出発した

会社で、満州、朝鮮、中国といった大陸に、新販路を開拓したのが、今日の基礎をつくった最初だ。

葛原大三は、京城、大連、新京、上海の支店長をつとめあげ、軍部にはかなり顔を売った。橘幸三郎は、この大陸時代から、彼の下で働いてきた男である。

軍部と手を握り、大陸や南方に進出していただけに、終戦は痛かった。一切が無に帰したようなものだった。

しかも、南方や大陸から、どしどしと社員が引揚げてくる。この連中を受け入れるのが、常務としての彼の仕事だった。

太平洋岸の精製工場は、すでに爆撃にやられていた。被爆を免かれた製油所があったとしても、操業すべき残存原油もない時代である。

仕方なく世界石油では、外科用の薬品、印刷用インキ、石鹼、靴墨などをつくり、これを販売しながら社員を収容した。

へ人間は財産である」という葛原大三の考えは、大陸時代に培われたものだ。販売会社にとって、まさしく人間は財産そのものであった。

昭和二十二年八月、来日したストライク調査団は、日本の製油所は、賠償にあてられる価値もないから、一日当り原油処理能力四万バレルを超えない設備能力を残して、すべてスクラップ化せよと勧告した。

世界石油は、過度経済力集中排除法の指定をうけたばかりだったから、このストライク報告はショックだった。

葛原は、製油・販売という、一つの未来図を描いていたからである。

しかし、昭和二十四年の、いわゆる米ソの「冷たい戦争」が、対日政策の百八十度転回をもたらし、「太平洋岸製油所の操業及び原油輸入に関する覚書」が発せられた。

石油業界は、活気づいた。

——石油の原産地は、いうまでもなくアメリカがトップであり、ついで中東、ヴェネズエラの順序となっている。そして日本には、秋田近辺に、ほんの少量産出されるだけである。

従って、日本の石油は、すべて海外から運搬されねばならない。そのためには油槽船——つまりタンカーが要る。

製油所を持たない世界石油としては、先ず独自の構想でタンカーを建造し、精製された製品——原油でなく石油を日本に輸入し、販売するより方法がなかった。

かつて日本の産業のエネルギーは、石炭であり、電力であった。

ところが戦後、石油化学の進歩と相俟ってエネルギーは、石炭から石油へと移行した。

石油の特性は、液体であり、その包蔵熱量が高いことである。もし石油が液体でなかったら、今日の内燃機関の進

歩はなかったと云われている。

ガソリン、ジーゼル、ジェットの各エンジンが、航空機、自動車、汽車、船舶などの動力源をなし、文明の支柱となつてゐることは周知の事実である。

さらに第二次大戦後に発展した石油化学工業は、化学原料としての石油の新しい面を浮き上らせた。熱源のみならず、合成繊維、合成樹脂、合成ゴムの原料、溶剤となるのだから誰もが石油に飛びついたのも無理はない。

ところで、世界の市場を独占しているのは米系五社、英系二社、あわせて七つの石油資本である。国際石油市場は、この七社が支配していると云つても過言ではないだろう。

しかし、石油需要の増大は、世界的にいつて製油能力の不足をもたらした。

アメリカでは輸出どころか、輸入する位だから、原油の供給源は中近東が、その中心地になる。でも、中近東は政情不安で、精製工場をつくるには、相応しい土地だとは云えなかった。

そこで七大石油資本は、消費地精製主義にのりだし、消費市場である日本に、その白い手をさしのべたのであつた。

国際市場を牛耳る七大石油会社は、カルテルを結び、世界のほぼ六割の原油生産を占め、圧倒的な地位を築いてい

るのだ。

日本国内の石油会社が、積極的に、国際石油カルテルの目ざす資本提携に働きかけ、青い眼の支配下に入ったのも、原油を持たない悲しさで、致し方のないことなのだった。

この外資提携は、ほぼ第一期と第二期にわかれている。第一期は昭和二十四年から二十六年にかけてで、「原油供給契約」と「株式投資」の形がとられている。輸入原油の長期確保と、製油所の復旧拡張のための提携である。

第二期は昭和二十七年以降。これは「資金貸与」と「技術援助」という形をとり、精製設備や、精製技術の近代化のためにとられたと見ることができる。

原油外貨は、石油精製設備をもつ会社にのみ割当てられた。「世界石油」は、この精製設備を持っていない。

世界石油専務として、手腕をふるいだした葛原大三は、当然のことながら、旧陸海軍燃料廠の残存施設に目をつけ

た。

この施設のうち、内地で石油精製を行なっていたのは、三重県四日市の第二海軍燃料廠、山口県徳山市の第三海軍燃料廠、同じく下関市の陸軍燃料廠の三つである。

もちろん、これら燃料廠の土地および残存設備には、石油会社や化学工業会社が狙いをつけ、競って利用申請をしていた。そのために、遂には政治問題化して紛糾した。

葛原大三が、政治力を発揮したのは、まさにこの時であ

る。

旧軍施設の払下げを受けるには、それなりの政治工作が必要だったのだ。

一方、葛原は、タンカーの建造に本腰を入れていた。これには龐大な資金が、必要だった。

彼は、東和銀行に日参し、当時、常務だった加賀を口説いた。

銀行としては、石油の精製が再開されたとはいえ、原油輸入割当の実績をもたない世界石油には、やはり不安があった。

「加賀さん。このままで行くと、日本の石油は青い眼に牛耳られますよ。いや、現に牛耳られてる。どこの会社も近頃は、重役会はぜんぶ英語でやっているそうですからね。ひとつ私に協力して下さい。民族資本の石油会社が、一つや二つあっても良いでしょう」

……こんなとき、彼の言葉つきには、ある説得力があった。というよりは、相手を屈伏させる気魄と云った方が、正確かも知れぬ。

日本人は例外なく西洋人に弱い。

葛原の「民族資本」という形容は、このとき東和銀行の加賀を動かしたのだった。佐賀県人で、葉隠武士の血をひく加賀は、こうした言葉には弱かったのである。

加賀は銀行の重役会で、

「石油はエネルギー産業の中心、いや、花形選手であります。その証拠に、どこの石油会社も儲かっている。当行としても、これから伸びる石油産業に着目して、一社か二社ぐらい取引先をもたねば嘘です……」

と熱弁をふるった。

東和銀行と世界石油との、強い結びつきが生れたのは、この時のタンカー融資がきっかけである。

葛原大三は、部下であり片腕でもある橋常務と相談して、タンカーの建造費を操作させ政治資金をつくった。

そしてこの金を政界、官僚たちに目にかけて思いきりバラ撒いた。その仲介の労をとってくれたのは、代議士の沖浩介である。

燃料廠の払下げ問題は紛糾していた。

しかし、かつての通産大臣であり、一派のボスである沖浩介は、彼から政治献金をうけ機密費をふんだんに渡されると、水に戻った魚のように、連日連夜、赤坂、柳橋といった料亭で、政治工作に協力してくれたのだ。

昭和二十八年一月、下関の燃料廠は、彼の狙い通り、世界石油に払下げられた。それと同時に、社長が脳溢血で急逝し、世界石油は名実ともに葛原のものとなった。

三

石油業界において、彼の名声を不動のものにしたのは、

アングロ石油の輸入だろう。

アングロは、中東にある砂漠の中の石油国である。

このアングロ政府が、昭和二十六年の暮に断行した石油国有化宣言ほど、世界をおどろかせた経済事件はあるまい。

国内における石油業の利権契約を破棄して、事業を接収したのだから、まるで無茶である。

政府としては目算はあったのだろうが、カルテル七社の実力を過小評価しすぎた。たちまち反撃にあつて、アングロは国際石油業から孤立させられる悲運に陥つたものだ。

予測せぬ事態の発生に、狼狽したアングロ政府は、接収した大量の石油を、世界に向かってダンピングしはじめた。

……このアングロ石油のダンピングの情報を、いち早く彼に教えてくれたのは、代議士の沖浩介である。

「世界の石油市場は、米国とソ連圏をのぞいたら、まあ七社の石油カルテルに独占されている。アングロ政府も窮余の一策でとつた手段だろうが、誰も買うやつはいないだろう。なにしろ、相手が悪い！」

沖は、そう云つて笑つた。

しかし、葛原はその話を、うっかり聞き流せなかった。へ安い石油が買える！これは大儲けのチャンスじゃない

か！」

彼は翌日、さつそく東和銀行へと出かけて行つた。そして加賀に相談した。が、相手は首をふつた。

「だめですよ、葛原さん。世界石油には、タンカーで二十億も融資したばかりで、その資金回収も始まつていない。それに下関の製油所の建設もあることだし……」

「なにを云つてるんだ、加賀さん。現実に安い石油がある。世界のどこも相手にしないとなると、うんと買い叩けるじゃないか？ 買付け契約をして、新しく完成する世界石油のタンカーで運ばせればいい」

「さあ、問題はそこだ。七社のカルテルの圧力がかかつてくる。契約はしたが、運べなかつたらどうする」

「輸送中のタンカーが、捕獲されることはあつても、まさか撃沈はしないでしょうよ。大丈夫です」

「じゃア輸入外貨の不足分は？」

「政府に交渉して、例外措置を認めさせればいい。これは日本のためになることだから、反対はできないでしょうが？」

「しかし、国際的な紛争に、政府は介入したくないと、逃げるんじゃないですか？」

加賀は初めから弱腰だった。

彼は粘つた。そしてとうとう、どこか他の国がアングロ政府と売買契約をしたならば、融資するという約束をさせ